〔書　評〕

『基礎語研究序説』

日野資純著

久野マリ子

一

本書は、著者が一九七八年来、静岡大学などで講義された基礎語研究の集大成である。基礎語の研究史についても考察があり、基礎語研究史序説ともいうべき成果となっている。著者には既に『方言学論考―観察と実践』（一九八四年　東宛社）、『日本の方言学』（一九八六年　東京堂）において、方言における基礎語の研究がある。

本書は、『今昔物語』などの漢字を主とする文献や注釈書類にある異訓をただす作業を通して、古典にある基礎語の意味の差を明らかにし、読みを確定して古典を正しく読もうとするものである。このように基礎語の概念、基礎語選択の手順について詳しく述べ、『今昔物語』の基礎語の意味を、類義語や対義語を組み合わせて体系的に分析した研究は本書が初めてであろう。また、分析の対象を基礎語に限定しているため、『今昔物語』以外の多くの古典を正しく読むのに役立つ。

著者は、「国語語彙史の研究にあたっては、今日、記述的観察的立場から、語義やその変遷、特定の語の成立事情などを究明するという方向が模索されているが、一方において、その記述的立場を踏まえながら、現実に生じている異訓をどのようにして統一すればよいかという実践的立場からのアプローチも必要であろうという観点に立って、一つの実践を試みたのが本稿である。特に古典文学の作品につき、原作者の意図した通りに正確に読むという視点に立つ時、このような基礎語の意味の分析が欠かせないことを強調しておきたい。（二七八頁）」と述べ、古典を後世に正しく伝えることは「研究者に課せられた義務」であると述べておられる。このような研究の成果が、古典解釈に生かされるだけでなく、現代語の解釈に応用されることを目ざしておられるが、さらに、この成果が国語学の分野だけでなく、文学の研究や解釈にもいかされるべきであろう。

筆者は語彙の史的研究は専門ではないので、著者が最も力をそそがれた研究成果である異訓の統一に対して評を述べるには適当ではない。しかし、ここで取り上げられた類義語のほとんどは現代方言で使われていて、しかも、共通語では同語形でも方言では別語形で言いわけて表現するものも多いので、方言や共通語の分析にも本研究は有益である。

例えば、ツドウとアツマルとは、共通語ではツドウが文語的でアツマルが日常の言語生活で用いられるとされるが、本書では、アツ

マルは「漫然と物や人が寄ってくること」、ツドウは「人間の意志が明瞭に作用して、物や人が何らかの目的のもとに寄ってくる」という点に中心があると分析される。琉球宮古方言に属する池間方言では、「あつまる」に該当する動詞に、本書で分析されたような意味の差のある動詞がある。ただ、漫然とあつまるという意味のウグナーイと、祭りなどの目的があって集まる意味のムヤイという動詞である。池間方言では、方言レベルの言語生活では、共通語形としてアツマルはあるが、ツドウという語は用いられない。

また、本書で分析されているサキ／アト／マエについても、例えば、『現代日本語方言大辞典　四巻』（一九九二年　平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野眞・久野マリ子・杉村孝夫編、明治書院）の「先月」の項目によると、各地方言にはセンゲツ・アトゲツ・マエノツキ・イジャンチゥキゥ（行った月）などの語形がある。現在を基点に既に過ぎ去った月を述べるのに、アト（後）とマエ（前）のような反対の意味の語形が複合語の要素として使われている。

本書で取り上げられた類義語は、いずれも簡単な漢字で表記され、現代でも使われている基礎的な語である点が注目される。このような現代語でも意味分析の対象として取り上げられる基礎的な語の類義語の意味の差は、古典では見逃されがちであった。

分析の方法は、例えば、「夜」ヨ／ヨルと「日」ヒ／ヒルや、「上」ウエ／カミと「下」シタ／モト／シモのような類義語・対義語、およびそれを含む複合語を中心にセットにして行われる。語は、その語だけで存在するのではない。類義語や対義語などのように関係の深い語やそれほど意味的関係が緊密でない語などが、類似の意味をもつ語として複数集まって、ゆるやかな意味分野を形成する。その意味分野の中で、語は他のメンバーと関連を保ちながら存在している。そして、それぞれに関連する意味分野の中の意味を領域を分担しあっているから、古典での基礎語も本書のような観点から分析されなければならない。

この本の構成は、次のようである。

I序論　一、単語認定の問題　二、基礎語の概念
II基礎語研究史——類義語研究を中心に——
III基礎語研究と古典の読解　一、まえおき　二、ヨ／ヨル　三、ヒ／ヒル　四、ウヘ／カミ　五、シタ／モト／シモ　六、ウチ／ナカ、ウチ／イヘ　七、マヘ／サキ　八、アト／ノチ　九、アト／ウシロ／シリ／シリヘ　十、オト／コエ／ネ　十一、アガル／ノボル　十二、ナリアガル／ナリノボル　十三、ツドフ／アツマル　十四、ヤム／トドム　十五、ツクル／コシラフ（コシラヘル）　十六、まとめ
異訓統一・改訂私案一覧
収録論文の発表機関と発表年月　あとがき　索引

二

二―一　第二章では、基礎語の概念の整理とそれを満たす条件について検討がなされる。

森岡健二氏の『語彙の形成』（現代語研究シリーズ1、一九八七年　明治書院）の中の五つの基本語彙の条件をもとに、「性別、年齢別、職業別、階層別、地域別等の相違がほとんどなく安定している語彙」という条件を加える。この他、基礎語彙＝日常語彙という観点から、徳川宗賢氏の『国語学大辞典』（一九八〇年　国語学会、東京堂）の日常語の概念を紹介し、「基礎語」というと、おのずから何が基礎かと

いう点を避けて通れなくなり、色々な異説が並存しうるのに対して、「日常語」といえば「日常生活に使用される語」という理解が成り立つのでやや客観的になりうるとして「日常語」という概念を支持しておられる。ただし、これは実際的で有効な基準であるが、「日常語」という概念も個人の経験によって決まるところが多いので、選ばれた語については選ぶ人によって幅ができる。やはり、明確な基準とは言いがたい点が残る。

著者は、基礎語を、基礎的な日常生活に使用される和語の単一語とする。そして、同一底本でありながら注釈書によって異訓のある語で基礎語を選び、それらが歴史的にどのような語と類義語関係を保ってきたかという点に着目して意味分析を行う。

著者が述べておられるように、基礎語についてはすでにさまざまな議論があり、何を基礎語と考えるかは、それぞれの研究の目的や使用用途によって異なる。

一例をあげれば、日本語教育のための基礎語と、小学生の国語教育のための基礎語は、共通の語もあるが違うものが選ばれるであろう。日本語教育のための基礎語といっても、日本語学習者が何を目的に日本語を学ぼうとしているかによって選択される基礎語も異なる。同様に、経済学や医学のための基礎語は異なるし、パソコンやワープロの個人用の日本語変換のための辞書に至っては基礎語は個人ごとに違うものが選ばれるであろう。

また、『現代日本語方言大辞典』（前出）の作業の基礎となった方言基礎語彙調査項目を例にとれば、方言基礎語彙は、その方言である程度の社会生活ができる程度の語彙を採集することを目的に選定している。そして、その方言で固定した言い回しでその方言の言語生活で必要なものなら、必ずしも一語である必要はない。

このように目的によって基礎語の内容が異なるのだから、さまざまな目的のために選ばれた基礎語は、結果的に重なる部分もできるだろうが、すべての要求を満たす基礎語グループの選定は困難であるし、できたとしても膨大な量になるだろう。

二―二　基礎語研究と古典の読解が、この書の中心をなす章である。

著者は、「古典読解上の現実的問題を克服することを原点に据えるため、単語の体系的整理は後回しにした」とされているが、ここで選ばれて分析されている語は、例えば、ヨ／ヨルのようにどの語も基礎語で、意味の部分体系をになう語である。一語一語の語の分析と語彙の体系性は、あたかも車の両輪のようなもので、どちらも視野に入れておかなければならない。

分析の手順として「単語としての形が相互に異なっていれば、その意味も異なる」という、L・ブルムフィールド『言語』（一九六二年　三宅鴻・日野資純訳　大修館）の命題を認めて、記述言語学的手法で分析が進められる。

ただ、「基礎語の語形や意味は、地理的歴史的に安定していることが多い」とあるが、必ずしもそうではない。すでに、II基礎語研究史のなかで著者もその点に触れてはおられるが、ある時代では基礎語と思われる語であっても、時代が下ると基礎語ではなくなる語もあることを強調しておきたい。

例えば、人体語彙では、赤ん坊の頭の「ひよめき」は、かつては基礎的な語であったと考えられるが、現代の若年層ではほとんどの人がこの語を知らない。膝頭の裏側の「ひかがみ」なども同様である。さらに、語形は同じでも時代によって意味が異なる。例えば、

スネは、『古事記』『日本書紀』に「那賀須泥毘古」「長髄彦」の用法があり、脚または脚全体を表したと考えられる。しかし、『石山本大般若経音義』では、「髄　骨中脂也、保祢乃奈豆支」とあるように骨髄を表すようである。この他、『和名類聚抄』や『類聚名義抄』にもホネノナヅキの記述があり骨髄の意味を表すようである。

各方言での差を見るならば、もっといろいろな事象が現れる。スネという語形の面から見れば、スネが脚全体を表す奄美方言や、膝頭を表す岡山・兵庫方言がある。これらの方言ではスネという語形は同じでも意味が違う。また、「親のすねをかじる」という成句でのみよく用いられる滋賀県湖北方言では、スネが人体のどの部分をさすかさえ曖昧である。使用域にも明らかに差がある。また、共通語ではフクラハギのように「膝頭から足首までの柔らかい部分」を表す語の構成要素であるハギが、脚全体を表す琉球方言もある。スネとハギはどちらも古くから文献に見られる語で、このような例からも簡単に「基礎語として意味の変化は少ない」とは言えないようである。時代や文献の種類によって、何が基礎語かということも変化がある。

二―三　アガル／ノボルと、ナリアガル／ナリノボル

基礎語を、その関連のある語との違いを明らかにするという観点から、複合語を対象とする分析は鮮やかである。具体的な分析の中からアガルとノボルの例を紹介しよう。

まず、十一章では、アガル／ノボルが分析される。従来の研究や索引で示されたなかにある読みの不一致を整理した上で、出発点、基点が固定しているのがアガル、到達点が固定しているのがノボルと説明される。

説明のため、これらの章で、分析の対象とされたノボルとアガルが複合語や、成句の要素として現れる動詞を表にまとめれば、次のようになる。

	「上がる」	「登る」
①	×	ノボリタツ
②	ミアグ	×
③	タチアガル	タチノボル
④	ナリアガル	ナリノボル
⑤	トビアガル	トビノボル
⑥	コエヲ　アグ	×

×はその用例が無いことを示す。

前部要素が共通で、後部要素として「上がる」、「登る」が現れる複合語は十一章では③タチアガルとタチノボルである（④⑤は十二章で）。これらの動詞の意味を整理すると、ノボルとアガルの意味の差が明確になる。

次の、十二章では、今昔物語の用例「成上ル（ナリアガル）」と「成リ上ル（ナリノボル）」の異訓について考察する。ナリアガルとナリノボルは十一章で分析した複合動詞と同じように、前部要素は共通で、後部要素に―ノボル、―アガルをもつ複合動詞である。

今昔物語では十一の用例中、成上ル（ナリアガル）三例、成リ上ル（ナリノボル）八例がある。種々の注釈書ではナリアガリ、ナリノボリの異訓があり、注釈書によって用例の所属数が異なる。著者は、従来の文脈の意味にたよる読み分けに疑問をもち、源氏物語、前田家本宇津保物語、枕草子、落窪物語、宇治拾遺物語、平家物語の用例からナリアガルとナリノボルの意味の相違を考察する。これらの作品の中でナリアガルとナリノボルの語が両方あるのは源氏物語だけで、他の作品にはナリアガルしか見えない。

その結果、ナリノボルの方は「まで」をともない、到着点を示すことに意味の中心がある。一方、ナリアガルの方は、基点であることを示す官位がしめされ、さらにそこから上位を目指して昇進することを示す。また、平家物語以降になるとナリアガルの用例のみになり、ナリアガリに現代語のような用法の「分をわきまえず不当に出世する」というマイナスのニュアンスが生まれるという歴史的な意味変化の過程を示す。

この他の成句や複合動詞の後部要素の分析から、アガルの意味の中心が、一足飛びに高くなるというような到達点を明示して、より上昇する動作の基点のほうに意味の中心があることを強調する。

さらに、IIの基礎語研究史で紹介された現代語のノボルとアガルの意味についても同様に考えた方が優れていること、アガルはむしろサガルの対義語としてとらえるべきこと、現代語においても複合語の要素になりうるか否かという実例も広く含めて分析するべきであると説いている。アガルとノボルは、現代語では、バカニシヤガルのような卑罵語の要素にアガルが用いられるが、雲伯方言では元の意味を反映しているシサガルのようにサガルが用いられる。現代方言での意味分析の対象としても興味深い語である。

二―四　ツクル／コシラフ（コシラヘル）

ここでは『日本言語地図　二巻』（一九六七年　国立国語研究所、大蔵省印刷局）の分布図、解説書と、『今昔物語集』以外の文献である『徒然草』の例をもとに、ツクルとコシラフの分析がなされる。

ツクルは完成の結果に重点をおいて表現し、コシラフは完成に到る経過、過程に重点をおいて表現する（中略）すなわち、ツクルは完成された結果を一般的抽象的に述べるのに対して、コシラエルは、完成に到る過程の具体的段階を個別的に述べるのだというような分析が可能だと考えられるのである。（三〇八頁）

『日本言語地図』にはツクルとコシラエルの共存地域の例がある。さらに、筆者は神奈川県愛甲郡愛川町三増方言の例からシンショーッコシレー（身上こしらえ）、コシレーッケース（仕立て直し）の例と、体力ヅクリとは使用される文体の使用域が異なることを指摘する。本書の指摘通り、方言の日常的な言語生活の複合語として体力ヅクリは、用いられない。しかし、これはこの語の構成要素が日常的ではない漢語のせいだけではない。体力ヅクリは、方言の言語生活ではあまり用いられない語ではないだろうか。

もし漢語という理由なら例えば、若ヅクリなどはどのように解釈されるのであろうか。若ゴシラエというのは、なじまない気がする。また、急ゴシラエの家は言えても、急ヅクリの家は言えない。米をツクルとは言えても、米をコシラエルとは言えない。

これはツクルの意味の中心が、何かを完成させることにあり、完成された対象の完成度（出来上がったときの品質や性能が十分かどうか）には、それほど重点をおかないためではないだろうか。

これに対して、コシラエルの意味の中心は、できあがった対象の品質や性能が備えているべき対象の目標（基準や規格）が決まっていて、それが達成されるまで工夫を凝らして、手をかけるという点にある。著者のいう「経過・過程を重視する」という点をこのように補いたい。例えば、体力ヅクリや若ヅクリとは言えても、体力コシラエや若ゴシラエとは言えないのは、体力や若くみせるという完成の目標に達する段取りがそれほど明確ではないためだろう。急ゴシラエの家は言えても、急ヅクリの家が言えないのは、急ぐという目

標がはっきりとしているためであろう。

兵庫県加西市方言では、ツクルとコッサエル（こしらえる）の語があるが、おしゃれをして出かけることを、ヨー　コッサエテ　イク（十分に手をかけておしゃれをしてでかける）、嫁入り支度を、ヨメイリノ　コッサエという。この場合のコッサエルは、出来上りの客観的な評価はともかく、出来上がった形や、質については達成されるべき目標が方言社会で決まっているのである。

琉球方言では、いろいろなものを作るという作業について、共通語とは異なる見地から作業過程を分節して、言葉を与えているが、意味としてはツクルとコシラエルに該当する語形がある。このような差を表す動詞は、全琉球方言にあるようである。

例えば、北琉球方言の中の沖永良部島和泊方言では、芭蕉布（芭蕉の繊維で織った布）を作るために糸芭蕉の樹を切り倒して繊維をつくり芭蕉の糸をこしらえるのが、アチコーユン（扱うに対応する〈コシラエル〉）。その糸を使って芭蕉布の着物を作るのは、ツクユン（作るに対応する〈ツクル〉）という。この他、アチコーユンの動作は、もやしの根と芽を取り除いて食べられるようにするとか、薩摩芋の腐ったり痛んだところを取り除いて料理ができるようにすることである。ツクユンは、弁当、砂糖黍、家、畑等いろいろなものをツクルことである。

このような解釈に従うなら、『徒然草』の水車の例も、ただ単に水車をツクルのではなく、正しく作動して機能するような基準に達するように手をかけて工夫することをコシラフということになる。

三

最後に、本書について勝手な感想を述べてみる。

意味の説明に、表や図解などの視覚的な表示があると分かりやすい。本文を丹念に読めば分かるのだが、映像に慣れた世代にとっては、少々読みにくい。

本書に説かれるような基礎語の使い分けが、古典ではあったとして、どうしてこのような異訓を防ぐ表記がされなかったのだろうかという素朴な疑問が残る。このように捨て仮名があるのは、当時からすでに意味の混乱があったからだろうか。そしてそれ以外の表記は、当時の人々にとってはあまりにも自明のことであったので特別な書き分けをしなかったのであろうか。むしろ、無意識にこのような意味の使い分けはあったかも知れないが、文献が成立した当時から意味の使い分けに曖昧な面もあったのではないだろうか。

著者は、現在においても共通語の基礎的類義語の分析が、必ずしも十分でないことから、現代語の類義語の意味分析にも言及されている。また、現代語ではこのような意味分析が盛んになってきたが、古典においてはこのような研究は十分とは言えないという。古典語では、まだ多くの分析されるべき語があるので、今後このような研究が益々盛んになることを望みたい。

（平成三年九月二十五日発行　桜楓社刊　A5判　三四八頁　二八〇〇〇円）

――國學院大学日本文化研究所助教授――

（平成五年一月二十五日　受理）